関西大学
アジア・オープン・
リサーチセンター
KANSAI UNIVERSITY OPEN RESEARCH CENTER for ASIAN STUDIES

DRAW YOUR ASIA

KU-ORCAS NEWS LETTER NO2

CONTENTS

センター長挨拶 …… P2
IIIFについて
オープンプラットフォームについて …… P3
2018年度 活動報告 …… P4
ユニット別活動報告 …… P6

センター長挨拶

関西大学アジア・オープン・リサーチセンター長

内田慶市

KU-ORCAS の現状と今後の展開

文科省の私立大学研究ブランディング事業に採択されて２年目に入った KU-ORCAS であるが、徐々に本格的な活動を開始している。

先ず手始めに２月の内外のデジタル・アーカイブの研究者を招いたキックオフシンポジウムを皮切りに、KU-ORCAS 全体のものとして、たとえば、ワークショップ「ベンダーからのデジタルアーカイブの提案～コンテンツホルダーとベンダーの良い関係！～」や講演会「(東)アジア研究×図書館×デジタルヒューマニティーズ」、フォーラム「図書館総合展」(於：パシフィコ横浜)、講習会「ガッツリ学ぶ TEI 一日講座～ TEI の入門から応用まで～」などを開催してきた。又各ユニットもそれぞれが独自の研究を展開しており、研究例会やシンポジウム、ワークショップを数多く開催した。

また広報活動もホームページ、Facebook、各種講演会やポスター作成などを通して積極的に展開し一定程度の社会的認知を得ることができているように思われる。

この他、国内外の機関とのネットワークの構築ということで、東京大学の U-PARL と連携協力体制を強め、北京外国語大学歴史学院とは北京外国語大学内に「近代東西言語文化接触研究センター」を立ち上げるなど積極的に展開している。

ところで、言わずもがなではあるが、このプロジェクトを進めていく上で、メンバーの共通理解として認識すべき点を確認しておきたいと思う。それは、デジタル化、アーカイブス化は手段であって目的ではないということである。あくまでも私達が目指すべきものは、それを研究にどう結びつけるか、社会にどのように成果として公開し還元していくかということ。すなわち、デジタル・アーカイブスの先にあるものを見据えて各メンバーが本プロジェクトに参画していくということである。そして、最終的には、デジタル・アーカイブ、オープンプラットフォームが切り拓く人文知の未来の具体的な姿を提示することが求められるのである。

KU-ORCAS 特別任命准教授

菊池　信彦

IIIF について

KU-ORCAS のデジタルアーカイブの特徴の一つに、IIIF（International Image Interoperability Framework、トリプルアイエフと読む）を採用している点が挙げられます。IIIF とは、画像データへのアクセスを標準化し相互運用性を高めるために、近年国際的に整備が進められている枠組みです。従来、図書館や博物館などの文化機関が提供するデジタルアーカイブでは、資料画像をその都度検索し表示させるという、いわば「閉じられた利用」が一般的でした。IIIF に対応することで、デジタル画像へのアクセスが容易になります。具体的には、文化機関の垣根を越えて複数の IIIF 対応画像データを一つのビューワで比較表示したり、各画像に対してメモ（アノテーション）を付けたりすることができるようになるなど、デジタルアーカイブの利便性が飛躍的に高まります。

KU-ORCAS は、IIIF を採用することで、世界中のユーザに向けて、本学の所蔵する東アジア文化資料を利用しやすい形で提供します。

オープンプラットフォームについて

デジタルアーカイブとは別に、KU-ORCAS は、「オープンプラットフォーム」の構築に向けても検討を進めています。この「オープンプラットフォーム」では、KU-ORCAS だけでなく、他機関が公開する IIIF 対応の東アジア関係資料も、一元的に検索できるようにすることを目的としています。この一元的な検索機能は「オープンプラットフォーム」の第一段階として想定しており、今後も、例えば、人文学にデジタル情報技術を活用したデジタルヒューマニティーズという分野の研究ノウハウの共有やクラウドソーシングによる資料翻刻等の協力を募る場として、文字通り「プラットフォーム」としての役割を果たすべく機能拡張を目指していきたいと考えております。

KU-ORCAS は、「オープンプラットフォーム」を通じた東アジア文化研究の国際ネットワークの構築を行い、また、そのハブ機関としての役割を果たすことで、関西大学の東アジア研究を発信していきます。

2018年度 活動報告

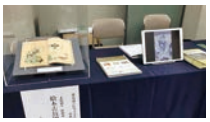
2018

- **4月1日** ヴァチカン図書館・チェーザレ・パジーニ館長と対談（於：ヴァチカン図書館）（リーダー）内田
- **4月15日** 2018 Spring Tokyo Digital History Symposium（於：東京大学）（パイロット）菊池
- **4月20日** 第1回東西学術研究所研究例会言語接触研究班（リーダー）内田

- **4月28日** 国際シンポジウム「山本竟山の書と学問」中谷、陶
- **5月11日** 「KU-ORCAS がデジタル画像の相互運用国際規格・IIIF コンソーシアムに加盟」関西大学プレスリリース

- **5月11日** 東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門（U-PARL）訪問（パイロット）菊池
- **5月11日～7月28日** 泊園古典講座―2018 年度前期―「中国の古典を読む」、「三国志を読む」、「漢詩を読む」（ユニット 2）吾妻、長谷部
- **5月12日** 第 117 回人文科学とコンピュータ研究会発表会（於：東京電機大学）内田、菊池、永崎
- **6月2～3日** 国際シンポジウム「南アジアの鉄器時代」（ユニット 3）米田
- **6月2日** 日本現代中国学会 2018 年度関西部会大会「映画パンフレット・説明書から構想する観客史の可能性について KU-ORCAS の劇場資料アーカイブズとデジタル人文学」（パイロット）菅原
- **6月6日、13日、20日、27日** 第 47 回生涯学習吹田市民大学 関西大学講座（前期）東アジア「文化」のデジタルアーカイブ―新しい人文知を目指して―内田、森部、二階堂、中谷
- **6月17日** グリーンキャンパス「淀川の今と昔をデジタル画像にて紹介」（ユニット 2）中谷
- **6月23日** ワークショップ「ベンダーからのデジタルアーカイブの提案～コンテンツホルダーとベンダーの良い関係！～」（パイロット）菊池

- **7月5日** アジア研究文献探索セミナー「研究資料整理術」編（於：東京大学）（パイロット）菊池
- **7月14日** 第4回東西学術研究所研究例会東アジア宗教儀礼研究班「日中における中国思想・儒教研究の現状と展望」内田、吾妻、二階堂
- **7月18日** 研究者のためのオープンデータセミナー（URA）舘
- **7月21日** 公開シンポジウム「教育・研究資源としてのデジタルアーカイブ：その管理・活用・保存」（ユニット 2）二階堂
- **7月28日** 国際シンポジウム「大坂画壇と京・大坂の文化ネットワーク」（ユニット 2）中谷
- **8月4～5日** サマーキャンパス「研究ブランディング事業ブース設置」（URA）舘



- **8月9日** 講演会「（東）アジア研究×図書館×デジタルヒューマニティーズ」（パイロット）菊池
- **9月13～25日** 東アジア関連史料調査（於：ヴァチカン図書館他）（PD）小川
- **9月23日** 国際研究集会「飛鳥の古墳と新羅慶州の古墳」（ユニット 3）井上、米田

9月24日 関西大学フェスティバル in 東海（於：名古屋マリオットアソシアホテル）（リーダー）内田

9月24日 KU-ORCAS リニューアルポスター掲示開始　学内・駅等に掲示

10月11日～11月22日 ナイトミュージアム考古学入門講座（ユニット 3）米田、井上

10月13日 講習会「ガッツリ学ぶ TEI 一日講座
～TEI の入門から応用まで～」（パイロット）永崎

10月14日 シンポジウム「イメージ・メディア・アーカイヴ：南進・南向をめぐる戦争記憶のリミックス
ードキュメンタリー映画の上映とシンポジウム」（パイロット）菅原

10月14日 2018 古本大学講座（於：大阪古書会館）（ユニット 2）中谷

10月20日～21日 「デジタル化時代におけるグローバル中国語教育史
国際シンポジウム」（ユニット 1）奥村

10月20日～1月21日 泊園古典講座―2018 年度後期―「中国の古典を読む」、「三国志を読む」、「漢詩を読む」
（ユニット 2）吾妻、長谷部

10月26日～27日 第 58 回泊園記念講座 石濱純太郎没後 50 年記念
国際シンポジウム「東西学術研究と文化交渉」（ユニット 2）吾妻

11月1日 フォーラム「図書館総合展」（於：パシフィコ横浜）（パイロット）菊池

11月4日 飛鳥考古学巡検セミナー （於：明日香村）（ユニット 3）米田

11月10日 東西学術研究所・関西大学アジア・オープン・リサーチセンター
合同ワークショップ「日中自然言語処理に関して」内田、氷野

12月9日 まち FUN まつり「研究ブランディング事業ブース設置」

12月14日 第 14 回東西学術研究所研究例会東アジア宗教儀礼研究班
（ユニット 3）西本、原田

2019

1月26日 漢字文献情報処理研究会シンポジウム（ユニット 2）二階堂

2月9日 研究会「近代東アジアにおける西洋料理の伝播と受容」（リーダー）内田

2月26日 第 16 回東西学術研究所研究例会非典籍出土資料研究班「中國文獻デジタル化の展望」
（ユニット 1）玄

3月15日 デジタルアーカイブ学会第 3 回研究大会企画セッション（於：京都大学）内田、藤田

3月27日 KU-ORCAS 国際シンポジウム「デジタルアーカイブと東アジア文化研究―現状と課題―」
（KU-ORCAS 全体行事）

ユニット1 主幹
外国語学部教授　奥村 佳代子

ユニット1 東西文化接触とテキスト

■活動状況

本年度の活動は、第一にアーカイブ構築に向けた準備作業を開始しました。

近代中国語コーパスに関しては、問題点を整理し再整備に着手し始めました。次年度内に本学所蔵鱒沢文庫の文献を新たに加えた上で公開を再開することを目標としています。

本学所蔵資料のアーカイブに関しては、現有データを調査したところ、新たに総合図書館所蔵の資料を追加することになりました。目録調査と図書館での実地調査を行い、採録が確定した資料から順次撮影及びテキスト入力作業に着手します。

テキストデータを構築するにあたり、10月13日に開催されたKU-ORCAS主催TEI一日講座にユニット１のメンバーは積極的に参加しました。まだ試行段階ではありますが、TEIをテキストデータ作成の基礎とする予定です。また、来年度、東アジア文化研究科にTEIを学ぶための科目を置き、人材養成を目指すことになりました。

第二に、国際学術会議を開催しました。中国語教育史研究の分野における「デジタル化」に対する認識と可能性を深める、貴重な機会となったのではないかと思います。

10月20、21日開催の主催国際学術シンポジウム「デジタル化時代におけるグローバル中国語教育史国際シンポジウム」は、中国北京を拠点とする世界漢語教育史の第10回大会として初めて日本で開催され、中国と日本の研究者44名が研究発表を行い、活発な討論が展開されました。

特に、ハーバード大学東アジア言語文明系フェローDonald Sturgeon先生による基調講演「数字人文与漢学教育：挑戦和機遇」（「デジタル人文学と中国学教育：チャレンジとチャンス」）は、ご自身のctext.orgについて、その成り立ち、考え方、それのもたらす研究の発展と深化、さらには必要とされる人材の育成に至るまで、デジタル人文学を取り巻く現状を全面的かつ具体的に掘り下げた内容でした。シンポジウムの参加者の多くは文献資料を研究対象とする個人でしたが、質疑応答の際には、すでに公開されているデジタルアーカイブの恩恵にただ与るだけでなく、テキストデータの作成や資料の公開の方法に関する具体的な質問がなされ、提供する側になることを視野に入れた発言が目立ちました。

大阪大学文学部教授田野村忠温先生による基調講演「指称漢語的諸名称 - 它們的歴史与用法差異」（「漢語を指す呼称 - その変遷と用法の違い -」）は、デジタルアーカイブと書籍資料の両方を適切に活用することによって可能となる研究モデルとも言うべき内容で、今後の研究の可能性を示されました。

また、北京外国語大学全球史研究院李雪涛教授とKU-ORCASセンター長・内田慶市教授が、９月４日に近代東西言語接触研究センター（近代東西語言接触研究中心）の設立準備としてワークショップを開催、12月22日に正式にセンターを設立、合同主催で開設記念となる学術会議が北京外国語大学で開催されました。今後、デジタルアーカイブに基づいた研究の充実が期待され、KU-ORCASの果たす役割は大きいと言えます。

その他、11月10日に東西学術研究所との合同ワークショップ「日中自然言語処理に関して」を開催しました。国立国語研究所教授小木曽智信先生が「古典日本語テキストの形態素解析」と題して講演され、ユニット１メンバーの目白大学講師氷野善寛先生が研究発表を行いました。また、2019年２月26日開催の東西学術研究所研究例会「中國文獻デジタル化の展望」において、ユニット１メンバーの本学教授玄幸子先生が研究発表を行いました。

以上が本年度の主な活動状況です。

■今後の予定（今年度の反省点）

講演や研究発表、勉強会を通じて、デジタルアーカイブの必要性と構築法を学ぶ活動は実績を積みつつありますが、今後はKU-ORCAS独自のアーカイブ構築に向けてより重点的に取り組みたいと思います。

次年度以降の計画は以下のとおりです。

2019年度

(1)近代中国語コーパスの資料の補充とテキストデータ作成、「新版近代中国語語彙コーパス」として、一部公開を再開する。

(2)本学総合図書館所蔵資料の撮影とテキストデータ作成を開始する。

(3)西洋料理に関する近代中国語資料の解読を進める。

2020年度

(1)「新版近代中国語語彙コーパス」の整備を進める。

(2)「16世紀以降東西言語文化研究総合アーカイブ（仮）」の作成と「漢訳イソップ」「漢訳聖書」のデジタル化を行う。

(3)「新版近代中国語語彙コーパス」による近代概念史研究を開始する。

(4)中国に伝えられた西洋料理に関するイベントを開催する。

2021年度

(1)「16世紀以降東西言語文化研究総合アーカイブ（仮）」の運用開始、完成を目指す。

(2)オープンプラットフォームによる近代概念史研究に関する特別研究集会を開催する。

ユニット2 主幹
文学部教授　吾妻 重二

ユニット2　東アジアの中の大阪の学統とネットワーク――泊園書院と大坂画壇

1. 泊園書院のアーカイブ構築に向けて

関西大学の知的ルーツの一つとなった泊園書院（はくえんしょいん）につき、書物や記録、印章、門人などさまざまな情報のアーカイブ化を行っています。泊園書院は江戸後期から昭和前期まで栄えた漢学塾で、商業都市大阪の繁栄をバックに全国各地から門人が集まり、多くの有為な門人が育ちました。

現在「WEB 泊園文庫」と「泊園印章データベース」の IIIF 化を進め、解説と鮮明な画像を付して公開すべく準備中です。一万六千冊あまりにのぼるぼう大な「泊園文庫」は漢籍の宝庫であり、全国的にも有名なコレクションです。また藤澤東畡（とうがい）、南岳（なんがく）ら代々の塾主180余顆にのぼる印章は貴重な文物として芸術的にも美しい輝きを放っています。これらのデジタルアーカイブ公開により、近世・近代大阪文化のエッセンスに触れることができるでしょう。

2018年10月26日・27日には私、吾妻を中心に「東西学術研究と文化交渉――石濵純太郎没後50年記念国際シンポジウム」を開催しました。泊園書院関係者としてその運営に尽くした石濵は戦後、関西大学の発展に寄与し、近代的東洋学のパイオニアとして国際的にも幅広い人脈をもっていました。シンポジウムでは京都大学名誉教授の高田時雄氏、中国人民大学教授のキリル・ソローニン氏、浙江大学教授の劉進宝氏、東京外国語大学名誉教授の中見立夫氏、大阪大学名誉教授の生田美智子氏をはじめ、多くの研究者および KU-ORCAS メンバーによる発表を通して石濵の学問の意義と魅力に迫りました。その成果は、論文集として次年度刊行の予定です。

このシンポジウムの開催に合わせて10月22日から11月17日まで、図書館展示室において「石濵純太郎とその学問・人脈」展を開催するとともに、展観目録を刊行して好評を博しました。

このほか、梅田キャンパスでは「泊園古典講座」として「中国の古典を読む」「漢詩を読む」「三国志を読む」の３講座を春と秋各６回、市民向け連続講座として開いています。

もう一つ重要な作業として現在、「泊園門人データベース」の構築に向けて準備を進めているところです。門人録や成績表、月謝領収簿などの資料を入力するほか、二千名程度の氏名の明らかな門人につき伝記資料を鋭意収集しています。完成のあかつきにはこれまた WEB 上で公開し、同書院のネットワークと活動の様相をわかりやすく発信します。

2020年秋には「藤澤南岳没後百年記念シンポジウム」（仮称）および展示会を開催すべく企画中です。泊園書院の黄金期を築いた南岳は大阪文化の顔として諸方面に大きな足跡を残しました。関係各所にはたらきかけ、その名声にふさわしいイベントにしたいと考えます。

2. 大坂画壇アーカイブの構築プログラム

関西大学が所蔵する大坂画壇の絵画約700点をデジタルアーカイブとして公開する作業を行っています。内容は、文人画家の木村蒹葭堂、岡田米山人・半江父子、戯画作者の耳鳥齋、写生派の西山芳園・完瑛父子などの絵画です。

世界の研究者や美術愛好家が、これらのまとまった大坂画壇のコレクションの情報をインターネット上で受けとることができます。絵画の全体図はもちろんのこと、細部の落款（作者のサインや印章）を拡大して、美術史研究に寄与するとともに、美術愛好家の趣味にも対応できる体制をつくります。これらのアーカイブ資料は、真贋の判定にも役立つように鮮明な画像で紹介する予定です。現在、ほとんどの絵画の写真撮影を終えており、ユーザーインターフェイスの開発とその実用化に着手しつつあります。

また、京都国立近代美術館、イギリスの大英博物館、ロンドン大学と提携して、大坂画壇の研究を進め、2021年には関西大学博物館で大坂画壇展を開催し、続いて、関西大学との提携によって、京都国立近代美術館で大規模な「大坂画壇と京・大坂の文化ネットワーク展」（仮称）を大英博物館所蔵の大坂画壇作品を借用して開催する予定です。加えて、大英博物館でも「大坂画壇と京都の絵画展」を2021年に関西大学との提携プログラムとして開催する構想が浮上しつつあります。この企画は、関西大学のブランドを強固にする目的で推進いたします。

すでに、2018年７月に、関西大学の中谷伸生教授とロンドン大学のアンドリュー・ガーストル教授を中心にして、大英博物館の矢野明子学芸員、京都国立近代美術館の平井啓修研究員、大阪商業大学の明尾圭造准教授兼商業史博物館主席学芸員、スコット・ジョンソン関西大学名誉教授を招聘して、国際シンポジウム「大坂画壇と京・大坂の文化ネットワーク」を開催しました。以上の企画を実現することで、関西大学から大阪文化の神髄を世界に向けて発信いたします。

ユニット3 主幹
文学部教授　西本 昌弘

ユニット3　古都･史跡の時空間

1. 概要

飛鳥・難波・京都など日本の古都を形づくってきた地域の歴史を掘り起こし、この地域の史跡や文化遺産に関わるデータベースを構築することを目標としています。関西大学には、高松塚古墳の発掘に象徴される古代飛鳥研究、なにわ大阪研究センターが保有している難波・大阪研究の大きな蓄積があります。こうした形で本学に蓄えられている発掘調査データや出土品データ、拓本資料データ、絵図・古地図データなどを集成して、オープン・プラットフォームに組み入れるとともに、新たに飛鳥時代の古墳の発掘調査を実施し、その成果を展覧会などの形で広く紹介します。

あわせて、本学図書館が所蔵する岩崎美隆文庫本・内藤文庫本・泊園文庫本・本山文庫本などの中から、難波・大坂地域や淀川流域・京都郊外の都市に関する古典籍・古文書・古地図・寺社境内図などを調査し、この地域の歴史空間復原の手がかりを集めます。

2. 今年度の調査・研究内容

①古都飛鳥・難波などに関わる拓本資料、古地図資料などの調査・研究を進めます。

②関西大学図書館所蔵の岩崎美隆文庫本・内藤文庫本などの撮影とデータベース化を行います。

③終末期古墳のデータ集成

古墳一覧表を作成し、代表的な古墳の説明文・写真・図面などを集成します。また、朝鮮半島の墳墓集成に関する概要をまとめます。

3. 現在の進捗状況

①関西大学博物館所蔵の拓本資料や関西大学図書館所蔵本山文庫本の古地図の中から、調査・検討対象となるものを選定中です。拓本資料については、調査・検討を開始しました。

②岩崎美隆文庫本の撮影を進め、『日本霊異記』、『玉海』、『玉藻』、『後愚昧記』などの撮影を完了しました。

③関連する研究の内容を整理・分析中です。代表的な古墳から一覧表を作成し、説明文の作成に着手しています。

4. 今年度の研究集会・研究例会

第１回国際研究集会「飛鳥の古墳と新羅慶州の古墳」を下記の通り開催しました。飛鳥の段ノ塚古墳・小山田古墳に関する最新の研究成果が披露され、終末期古墳の問題点を検討したのち、新羅慶州の６・７世紀古墳とその副葬品に関する新知見が報告され、日本の終末期古墳との類似点が議論されました。

2018年９月23日（日）以文館４階セミナースペース
井上主税（関西大学文学部准教授）
「趣旨説明および当時の朝鮮半島情勢について」
今尾文昭（関西大学非常勤講師）
「段ノ塚古墳の内・外部構造と終末期古墳」
金東淑（韓国聖林文化財研究院調査研究室長）
「６・７世紀の新羅古墳に関する最近の研究動向について」
コメンテーター　米田文孝（関西大学文学部教授）
右島和夫（群馬県立歴史博物館長）
宇野愼敏（北九州市芸術文化振興財団）

2018年度第14回東西学術研究所研究例会

KU-ORCASとの共催にて、第14回研究例会を下記の通り開催しました。日本古代・中世、中国遼代・清代、ベトナム近世の宗教儀礼に関する報告が行われ、東アジアの仏教・儒教に関する多様な実態が明らかにされました。日本の古都・史跡と宗教施設との関係についても、多大の示唆を与えるものでした。

2018年12月14日（金）　児島惟謙館１階第１会議室
佐藤文子（関西大学非常勤講師）
「９世紀日本における魂魄観の転換―慰霊としての「鎮国家」思想―」
原田正俊（関西大学文学部教授）
「鎌倉時代後期の南都北嶺と禅宗―虚構の宗論―」
井上智勝（埼玉大学人文科学研究科教授）
「神位記・宗源宣旨と神勅―神格上昇文書の日越比較―」
藤原崇人（関西大学非常勤講師）
「金代寺院秩序の一端―絳州白台寺「寺規」碑より―」
池尻陽子（関西大学文学部准教授）
「清廷におけるチベット仏教儀礼について―帝后喪事を中心に―」

劇場発行資料アーカイヴ

文学部教授　菅原　慶乃

本研究では、東アジアの各都市の映画館や映画会社が発行した映画パンフレットのアーカイヴを設計・構築を行っています。

〈エフェメラとしての映画パンフレット〉

今日、日本の映画館ではさまざまなグッズが販売されています。そのなかでも、映画パンフレットはもっともポピュラーな商品だといえるでしょう。けれども一般的な書籍とは異なり、映画パンフレットは通常は映画館のなかでしか販売・頒布されませんし、図書館に所蔵されることもほとんどありません。観客であるわたしたちもまた、誰がどうやってパンフレットを発行しているのか、ということについてあまり注目することもありません。それに、映画パンフレットの多くはいつのまにか家から無くなり散逸してしまいます。だいぶ時間が経過した後にふと読み返そうと思って探しても見当たらない、という経験は、多くの人の身に覚えがあるのではないでしょうか。

通常、このように書籍ではない印刷メディアは「エフェメラ」と称されます。ごく限られた期間しか使用されない資料を意味するこの語には、もともと「カゲロウ」という意味があります。エフェメラという語は皮肉にも映画パンフレットのような印刷メディアの短命であるという特徴を何ともよくとらえているのではないでしょうか。映画パンフレットが登場してから現在すでに百年以上の時が経ちましたが、その全貌はあまり研究されてはいません。その理由はまさに、パンフレットが儚いエフェメラであるからに他ならないのです。パンフレットは東アジアの映画館でも早い時期から発行され広く普及していましたが、現在は一部の蒐集家や研究者を除き、一般の方々の目に触れる機会もさほど多くはないというのが実情です。

〈映画パンフレットの資料的価値〉

１部１部の映画パンフレットは確かに短命なエフェメラかもしれません。しかし、数百部という単位でコレクションされた場合、集合体としての映画パンフレットは庶民の映画鑑賞文化や映画鑑賞習慣について実に多くのことを語りかけるのです。たとえば、パンフレットの記事の水準や、そこに掲載された企業広告などを経年的に見ることで、その映画館の主要な観客の属性を垣間見ることができますし、映画館の場内設備や環境、上映習慣がどうだったか、という情報も読み取ることができます。紙や印刷の質からは、パンフレットに費やされた費用がわかりますし、そのことは映画館のランクや経営状況を知る重要な要素となります。さらに、すでにフィルムが失われてしまった映画作品のパンフレットは、その作品のテクストを再現するために不可欠な情報を提供するという大切な資料でもあるのです。近年の研究では、映画パンフレットは単なる読み物にとどまらず、映画館と観客の双方を繋ぐ重要なコミュニケーション・ツールであったことが分かってきています。また中国の場合、パンフレットが観客の識字能力向上という社会改良運動にも密接に連動していましたので、映画史研究のみならず、文化史、教育史の観点からも興味深い事実を伝える資料だといえます。このように、映画パンフレットは多角的なアプローチからの考察が可能な、魅力に富むメディアなのです。

〈KU-ORCAS の劇場発行資料アーカイヴ〉

本研究が対象とする資料は筆者が個人で所蔵している映画パンフレット約350余部で、それらは概ね1910年代から1940年代に日本・中国・植民地期朝鮮で発行されたものです。このうち、中国で発行された映画パンフレットは、映画館が発行したものの他に、映画会社が発行していた「特刊」も含んでいます。主なものは次の通りです。

【日　本】

・『デンキカン・ニュース』（東京、1920年 ~1921年）
・『松竹座ニュース』（大阪、1926年～1929年）

【中　国】

◎映画館パンフレット
・『大華　ロキシー』（大華大戯院、1943年～1944年、上海）
・新光大戯院・滬光大戯院・光華大戯院・金城大戯院・大光明大戯院の「電影説明書」（1930年代後半上海）
・アポロ大戯院、オデオン大戯院、オリンピック大戯院の「電影説明書」（1920年代、上海）
・『真光ニュース』（真光電影院、1940年代、北京）・『レックス（芮克）・ニュース』（レックス・シネマ、1940年代、北京）

◎特刊
・『中聯新片特刊』および『華影新片特刊』（「淪陥期」上海）
・明星、大中国、大中華、民新などの映画プロダクション発行の各種特刊

【植民地下朝鮮】

・『大正館ニュース』（1930年代、「京城」）

2018年度は、映画パンフレットの撮影・デジタル化を進めると同時に、メタ・データの作成・整理を行いました。今後は、国内外で映画館・劇場資料のアーカイヴズやデータベースを運営・研究する諸機関と情報交換や共同研究を行い、研究リソースの活用を図る予定です。最終的には、エフェメラを用いた新しい観客史を構築することを目標にしています。

〈参考文献〉

菅原慶乃「劇場発行資料を用いた新たな観客史の構築にむけて――映画プログラム・映画説明書のアーカイヴズ構築とその活用について」『関西大学中国文学会紀要』第40号（2019年３月発行予定）

菅原慶乃『映画館のなかの近代――映画観客の上海史』（晃洋書房、2019年刊行予定）

中国石刻資・史料アーカイブズ

文学部教授　森部　豊

1．概要

本ユニットは、本年度は個人で活動しており、グループによる成果はない。アーカイブズ構築に関する作業については、直接、構築に関わる具体的なものは行わず、その予備作業として石刻史料にもとづく個別的研究の発表、および中国大陸における石刻資・史料に関する調査とそれに関するシンポジウムへの参加をおこなった。

本ユニットが当面目指すものは、関西大学東西学術研究所が所蔵する中国出土の石刻資・史料のアーカイブズ構築とその公開である。その先には、例えば、現在、冊子体で公開されている中国の北朝、隋、唐、五代など各時代の墓誌目録をデータベース化することも見据えているが、2018年度の段階では、まだ具体的見通しは立っていない。

その一方、本ユニット担当の個人的作業として、まず、中国遼寧省朝陽市から出土した唐代の墓誌を利用し、唐朝の非漢人に対する支配の形態（羈縻支配）を、従来の「間接統治」という見方から一歩進めて「直接統治」の側面があったことを浮かび上がらせた研究発表を行った。また、同じく中国出土の墓誌史料を利用することにより、中国唐代から五代にかけて、ソグド人が政治・軍事的に中国史の展開に大きく関与していた事実を概括的に講演した。

なお、2018年12月８日に関西大学東西学術研究所の第13回研究例会を開催し、中国遼寧省朝陽市出土の墓誌をめぐって、唐代のこの地域にいた契丹人と高句麗人に関する研究発表を行った。この研究例会はORCAS活動の一環と表明していないが、内容的には、深く関係するものである。

2．今年度の調査・研究成果

①【海外調査】モンゴル国における突厥・ウイグル時代の石刻史料調査（2018年７月23日―７月31日）

②【海外調査】中国内モンゴル・遼寧省における唐・契丹国（遼）時代の石刻史料調査（2018年）

③【研究発表】森部豊「唐朝の羈縻政策に関する一考察―唐前半期の営州都督府隷下羈縻州を事例として―」、東洋史研究会2018年度大会、2018年11月４日、京都大学

④【招待講演】森部豊「石刻史料から見た唐五代のソグド武人」、翟門生的世界・石刻上的南北朝学術研討会、2018年11月17日―18日、中国・深圳市南山博物館

⑤【研究発表】森部豊「唐前半期の営州における契丹人と高句麗人」、2018年度第13回研究例会、関西大学東西学術研究所

・東アジア（韓国、中国、ベトナム、日本）碑石のアーカイヴズ
・関西圏朝鮮関係金石拓本のデータベース化
・古代朝鮮（韓国）の王陵・寺院アーカイヴズ（資料集成、図版・写真のデジタル化）
・古地図を利用した前近代朝鮮の交通路・歴史的景観の復元

文学部教授　篠原　啓方

概要：活動は、主にデータベースの構築・公開に向けた資料の整理である。代表者が調査・収集してきたデータを、データベースに適した配列に組み直し、必要な追加情報を入力するという、基礎的な作業を進めている。

Ⅰ 東アジア（韓国、中国、ベトナム、日本）碑石のアーカイヴズ

１．碑石の画像データベースに関する活動

１）これまで調査した碑石のデジタルデータについて、日付別に整理してきたものを、年代別に入れ替える作業を進めている。

２）フィルムで撮影したデータのスキャンと、デジタルデータへの統合作業を行っている。

３）メタデータとして、①名称、②年代、③種類（様式）、④場所（所蔵）、⑤撮影日時の入力を進めている。

２．碑石データ収集（韓国・ベトナム・中国・日本）

今夏、韓国における調査で、朝鮮時代の士大夫墓の調査を数例行った。

Ⅱ 関西圏朝鮮関係金石拓本データベース事業

『日本現存朝鮮本研究　史部　金石』（東国大学校出版部、2018）、「館蔵今西龍博士蒐集朝鮮金石拓本目録」『ビブリア』100（1993、天理大学図書館）に掲載された朝鮮金石拓本の目録を作成している。

Ⅲ 古代朝鮮（韓国）の王陵・寺院アーカイヴズ（資料集成、図版・写真のデジタル化）

韓国における寺院の発掘調査報告書の目録作成を進めている。

Ⅳ 古地図を利用した前近代朝鮮の交通路・歴史的景観の復元

韓国で刊行された朝鮮古地図（影印、図録）の目録を作成している。

林謙三と20世紀東アジア音楽研究

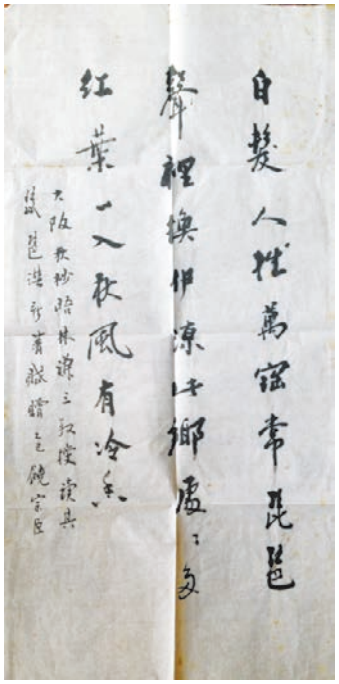
文学部教授　長谷部　剛

2017年３月に『林謙三『隋唐燕楽調研究』とその周辺』(山寺三知と共編訳、関西大学出版部)を刊行しました。同書は、東洋音楽学者・林謙三(1899-1976)の1930年代の中国語による著作を日本語に再翻訳し、さらに関連資料を収録して解題を加えたもので、これによって林謙三初期の業績をふたたび明らかにすることができました。林氏は太平洋戦争中に敦煌琵琶譜の解読に取り組み、これに成功。その業績は1950年代に中国で翻訳・紹介され、中国の音楽学界に大きな衝撃を与えます。林氏の復元方法は、例えば上海音楽学院教授の陳応時『敦煌楽譜解釈辨証』(2007年)に批判的修正のうえ継承され、中国の古代音楽研究の重要な基礎となっています。約1200年前の唐代音楽の原貌が日本の音楽学者の手によって復元されたのですから、林謙三の東アジア音楽研究はいまだに日本・中国の学術界に大きな影響を及ぼしています。

2011年より私は林氏遺族のご許可を得て、林謙三の遺した研究資料の整理・分析に取り組んでいます。これらの資料は、林氏の広範な研究内容・専門的かつ独創的な研究方法を知ることができるばかりでなく、20世紀東アジア音楽研究の重要人物との研究上の交渉をも知ることができます。例えば、敦煌文献に見られる唐代音楽の実態に迫ろうとした学者に香港の饒宗頤(1917-2018)がいます。饒氏は、林謙三没後の1980年代、世界の敦煌学者・音楽学者を動員して敦煌琵琶譜の研究を推進していますが、その際には林謙三の研究を改めて中国語に翻訳・紹介しています。しかし、林氏生前に饒氏とどのような研究上の交渉があったのかについては、これまでわかりませんでした。

私は最近、林氏の遺した資料のなかから、饒氏から林氏に送られた複数の書簡を発見しました。そのなかには、饒氏の七言絶句もあり、題詞の「乙巳」という干支から1965年に両者には交際があったことがわかりました。敦煌琵琶譜の解読およびその演奏方法の復元は、これまで旧説への批判・修正、新説の提出が連続的に行われてきた、非常に活発な研究領域です。私は現在、林・饒氏および陳応時氏の研究業績を読みこみ、「敦煌琵琶譜研究史」の構築を進めていますが、公刊された著作だけでなく、林・饒氏といった、20世紀東アジア音楽研究の泰斗のあいだに、いったいどのような交際・交渉があったのかについても目を向けています。

林謙三と交渉のあった学者は饒宗頤にとどまりません。Robert Von Gulik(中国名「高羅佩」,1910-1967)、卞趙如蘭(1922-2013）などとの交渉からも、世界的視野から20世紀東アジア音楽研究の軌跡を俯瞰することができます。私は「林謙三東アジア音楽研究デジタル・アーカイブズ」の構築を推進し、20世紀東アジア音楽研究史を記録することを計画しています。



DRAW YOUR ASIA

KU-ORCAS

関西大学
アジア・オープン・
リサーチセンター

動画で研究紹介をしています

本ニューズレターの『KU-ORCAS』ロゴに端末をかざすと、
研究メンバーの研究紹介動画をご覧いただけます。

▼ご利用方法

❶ AR無料アプリ「COCOAR2」をダウンロード

Download on the App Store　GET IT ON Google Play

■iOSの場合
「App Store」で「COCOAR2」と検索するか、QRコードからダウンロードしてください。
※互換性：iOS7.0以降、iPhone、iPodおよびiPodtouch対応。

■AndroidOSの場合
「Google Play」で「COCOAR2」と検索するか、QRコードからダウンロードしてください。
※Android要件：4.0以上。

❷ アプリを起動して、対象画像に携帯端末をかざす

NO2 KU-ORCAS NEWS LETTER

発行日　2019年3月31日
発　行　関西大学アジア・オープン・リサーチセンター
〒564-8680　大阪府吹田市山手町3丁目3番35号
TEL:06-6368-1834　E-Mail:ku-orcas@ml.kandai.jp
http://www.kansai-u.ac.jp/ku-orcas/